

五月は両国 荒れ模様
2026年夏場所観戦雑記

場所前の横審総見の報道を見て、霧島の体の色つやが良く、腰の運びに安定感があるのが目立った。そして、横綱大の里と大関安青錦の休場が発表されて、場所が始まった。

●初日の印象

前半では、新入幕の若ノ勝の力強い押し相撲が目立った。中盤の土俵では美ノ海の腰の低い、巧さを感じる取り口が目立った。そして後半の土俵では、霧島の取り口が光って見えた。腰の構えに揺らぎがなく、落ち着いて隆の勝をさばいているように見えた。

しかし、最後の二番の取り組みはひどいものだった。琴櫻は棒立ちのまま藤ノ川に好きなように相撲を取られて、土俵外に突き出されてしまった。

そして結びの一番は、必要以上に長いにらみ合いを繰り返した豊昇龍は、粗雑な取り口で高安の攻めに対応し、右足が開きすぎて股裂き状態になり敗退。素人の目で見ても、太ももの裏側の筋肉の肉離れと想定できるような落ち方だった。花道の途中から車椅子に運ばれて、休場は必至の状態だった。今場所も、看板を上から一枚ずつ剥がしていくような幕開けになった。

●そして三日目になり

三日目が終わった所で、全勝は霧島・若隆景・琴栄峰・翔猿の四人だけになってしまった。

怪我により序の口まで陥落してしまい、今場所ようやく十両まで戻ってきた炎鵬が三戦全勝で健闘している。この先どのぐらいの勝ち星を挙げられるか、注目している。

●序盤終了の景色

五日目を終えて、全勝は霧島と琴栄峰の二力士だけ。そればかりか、1敗で後を追うのも六力士だけ

成績	横綱・大関	関脇・小结	平幕
5勝	霧島		琴栄峰
4勝1敗		若隆景	豪ノ山・藤青雲・翔猿・若ノ勝・藤凌駕

という状況。低レベルな場所にならぬようにと祈るばかり。

霧島は体型を見ただけで好調さを感じる。筋肉のふくらみ・張りと十分に準備を整えてきたことを感じさせる表情が、それを感じさせる。

琴栄峰は、高く足を上げた(少々見せすぎか?)四股の踏み方が示すように、体幹がピシッと決まっており、足腰の安定度が高い。過去を振り返っても、遠藤を始めとする「高い四股をゆっくり踏める力士」は足腰がしっかりしている。積み上げてきたものが少しずつ成果となって表れてきたのかもしれない。藤青雲・若ノ勝・藤凌駕の新しい力も加わり、面白い場所になってきた。

●中日が終わって

成績	横綱・大関	関脇・小结	平幕
7勝1敗	霧島	若隆景	翔猿
6勝2敗			豪ノ山・琴栄峰・藤凌駕

琴栄峰は藤凌駕にうまく相撲を取られて完敗、2敗に引きずり降ろされた感じになった。

霧島は豪ノ山の猛攻に押し出さ

れて1敗に後退し、ここで豪ノ山の好調ぶりが大きく浮かび上がってきた。ここまでの霧島の取り口を見る限り、「まさか……」の結果だったが、それ以上に豪ノ山が力を付けてきたことがわかった。

●中盤が終わり(10日目)

「まさか・・・」がいくつも重
なって、賜杯争いの絞り込
みはならず、2敗で6人が

成績	横綱・大関	関脇・小結	平幕
8勝2敗	霧島	若隆景	豪ノ山・琴栄峰・翔猿・藤凌駕

並ぶという「ご破算」の状態になってしまった。中日までの相撲内容から見ると霧島・若隆景の相撲が光っていたが、ここまで来て、豪ノ山の存在が浮かび上がってきたが、翔猿・藤凌駕も良い動きをしている。終盤の直接対決を見ないと、簡単に想像するのは難しい状況になってきた。

●終盤のサバイバルゲーム

先頭集団は2敗で6人が並んで、次に3敗で4人が続くという混戦を感じさせる状態での終盤戦。

11日目で先頭集団は3人に絞られ、12日目で更に絞られて霧島と琴栄峰だけになった。

霧島の相撲には、落ち着きと巧さと粘りが感じられる。一歩後退したものの若隆景の技巧を感じさせる取り口と義ノ富士の基本通りではあるが速さと多彩さが目立っていた。

	2敗	3敗
10日目	霧島・若隆景・豪ノ山・琴栄峰・ 翔猿・藤凌駕	義ノ富士・朝乃山・伯乃富士・宇良
11日目	霧島・琴栄峰・翔猿	若隆景・義ノ富士・豪ノ山・伯乃富士・藤凌駕・宇良
12日目	霧島・琴栄峰	若隆景・義ノ富士・翔猿・宇良
13日目	霧島	若隆景・義ノ富士・琴栄峰

13日目を終えて、霧島が単独トップに立ったが、このまま逃げ切れるか再び混戦に戻るのかは、14日目の取り組み結果次第というところだろうか。

●私が選ぶ三賞候補

霧島が優勝すると想定して、殊勲賞は、霧島に土を着けて賜杯争いを面白くしてくれた豪ノ山としておく。敢闘賞候補は、場所を盛り上げた若手力士として琴栄峰と新入幕の藤凌駕。技能賞候補は、通人を唸らせる相撲の若隆景、もう一人許されれば果敢に多彩に攻めを駆使した義ノ富士。

さて、最後の二日間でどうなるか？

●14日目

と見立てたのだが・・・、霧島は伯乃富士に敗れてしまい、尻上がりに安定した巧さ満杯の若隆景に並ばれてしまった。義ノ富士・琴栄峰が4敗になってしまったので、霧島・若隆景の対決の形になった。霧島は13日目の琴栄峰戦で、土俵際の無理なうっちゃりて、膝を二つ折りにして落下したのが気になっていたが、ことによると、膝周辺を痛めていた可能性がある。

●千秋楽

両力士ともに本割は無
難にこなして、優勝決定

	3敗	4敗
14日目	霧島・若隆景	義ノ富士・伯乃富士・宇良・琴栄峰・藤凌駕
千秋楽	霧島・若隆景	義ノ富士・伯乃富士

戦となったが、立ち合いの低く速い若隆景の突っ込みで「勝負あった」という感じだった。若隆景は二度目でしかも四年ぶりの優勝。

実況中継の中では、早くも「綱取りの起点」「大関昇進の起点」と囁し立てていたが、冷静に考えてほしい。上位(横綱・大関)4力士が不在の場所で、事実上最高位の大関が優勝を逃したという結末に對してこういう話題が出てくるのは、いただけない。

また、小結で12勝をあげた力士を、関脇としての実績も積みぬ間に大関・大関と騒ぐのには違和感がある。関脇と言う地位を守った上で、さらなる実績を積み上げた力士に与えていた「大関」という地位。

いずれの力士も力はあるので時が来れば、その地位を手にするようになると思う。
瞬間最大風速的な実績評価と、節操のない規則の柔軟運用、さらに必要以上の騒ぎ立て方が「弱い横綱・大関」を産んできたということが、相撲協会も報道各社もまだ理解できていないようである。
「待つ」ことが育てることになるのだと思えないのだろうか。
待たないことによって、また駄目になってしまうのかもしれない。
西十両14枚目の炎鵬は、8勝7敗で場所を終えた。一点の勝ち越しで十両に留まれそうだ。来場所のさらなる活躍を期待している。

以上